

仏教と経済
—私の歩んだ途をふりかえりつづ—

足立英之

-1-

専門分野

- 経済学(マクロ経済学)
- 経済はなぜ成長するか
- 好況や不況はなぜ起こるか

-3-

自己紹介

- 1940年生まれ
- 神戸大学卒業(1963年)
- ロチェスター大学博士課程修了(1970年)
- 神戸大学(1965年～2004年)
- 流通科学大学(2004年～2008年)
- 尾道市立大学(2008年～2014年)

-2-

仏教との出会い

- 寝床で聞いた般若心経
- 父の死と般若心経
- 仏教への関心の深まり

-4-

仏教と経済の結びつき

- 1973年の石油ショック⇒資源の有限性の認識させる。
- ローマクラブ『成長の限界』(1972)
- シューマツハー『スモール・イズ・ビューティフル(小さは美なり)』(1973)⇒仏教経済学の提唱⇒消費中心社会から資源節約社会への転換を迫る。宗教や精神の価値を無視して行われている近代化への疑問を提示。

経済学の考え方

- 消費者は財の消費から得られる効用を最大にするように行動。
- 企業は利潤を最大にするように行動。
- 効用とは: 人が財を消費することから得られる満足の度合い。
- より多くの財の消費⇒効用の増加。
- より多くの財⇒より高い給料⇒労働の増加。
- 労働は不効用(マイナスの効用)をもたらす。

経済成長と欲望の満足

- 経済成長とは: 財の生産能力の増加。
- 財の生産増加⇒消費の増加⇒効用の増加⇒人々の欲望の満足の度合いが大きくなる。
- 経済成長によって、将来、すべての人々の欲望が十分に満たされる社会が到来するだろうか？

ケインズの予言

- ケインズの予言(『我々の孫たちの経済的可能性』1930): 「進歩的な諸国の生活水準は、今後100年のうちに現在の4倍ないし8倍の高さに達する。」⇒経済問題は解決される。人々の労働時間は減り(週15時間)、余暇を精神的・文化的活動に向ける。
- ケインズの予言の評価: 生活水準の上昇(4~8倍)の予言は実現。経済問題(所得格差、雇用問題、財政問題等々)は、先進国内でも世界的にも未解決。その理由: ①資産と所得の格差、②人間の欲望には限りがない(新しい財の登場が欲望を刺激)。

資産と所得の格差拡大

- ピケティ『21世紀の資本』(2013): 資産と所得の格差について、200年以上にわたるデータをを用いて分析。(ベストセラー)
- 一国内の格差: 2010年において、アメリカではトップ1%が総所得の20%を、日本ではトップ1%が総所得の7%を受け取っている。
- 先進国と最貧国の格差拡大: 1820~1998の間の1人当たり平均所得の増加は、アメリカでは22倍、アフリカでは3.5倍。

人間の欲望

- いのちとは欲望の束: 生きていくことは欲望が働いているということ(和田重正)。
- 欲望の進化: ①食欲・性欲・物欲、②支配欲・権力欲・名誉欲、③利他欲・無欲欲。
- 科学・技術は①の系統の欲望に駆られて発展してきた。
- 欲望と技術の相互作用: 欲望が技術を生み出し、技術が欲望を生み出す(経済成長)。

技術進歩と3つの危機

- 欲望⇒技術⇒欲望⇒技術(より速く、より安く、より便利)。新しい財の登場⇒欲望刺激。
- 労働節約的技術進歩⇒製品価格低下⇒大量消費⇒自然資源の浪費と環境破壊。(財の価格が自然資源の不足や環境のコストを適切に反映していない。)失業と賃金停滞。
- 技術進歩による3つの危機: ①人間性を蝕む技術、②生物界の環境破壊、③再生不可能資源の枯渇。

経済成長の限界

- ローマクラブ『成長の限界』(1972)の指摘。
「人口、工業化、汚染、食糧生産、資源使用の現在の成長率が不変のまま続かならば、100年以内に地球上の成長は限界に到達。見込みの強い結末は、人口と工業力の突然の制御不可能な減少であろう」
- レスター・ブラウン『プランB』(2009): 人類の総需要は1980年頃に地球の再生可能な容量を超過。2009年には持続可能な供給量を約30%超過。
- 最近の石油価格の低下(短期的現象): 資源の浪費と環境破壊に貢献。

経済成長に肯定的な見解

- 経済的至福(効用の上限)は存在しない。
新しい消費財の登場⇒生活パターンの変化⇒贅品が必需品に⇒生活水準の上昇。
- 経済成長は社会のモラルを引き上げる。
 - ①経済成長は生活水準の上昇を通して、社会的機会の拡大、多様性の許容、階層間の流動性、デモクラシーの重視等を強化(ベンジャミン・フリードマン)
 - ②資源・環境問題は技術進歩が解決するだろう。

シューマッハーの仏教経済学

- 現代経済学の考え方: より多く消費することが人々の効用(満足)を高める。労働はコストである。(消費至上主義⇒資源の浪費と環境破壊。)
- 仏教経済学の考え方: 文明の真髄は、欲望を増長することではなく、人間性を向上させることにある。そして人間性を形成するのは仕事である。(人生の中心となるのは仕事⇒最小限の消費で最大の幸福を得ることが理想。)

新しい生産方法と生活様式

- 消費生活による生活様式の目標は永続性。
- 農業: 生物学的にみて健全で、地力を高め、健康と美と永続性を生むような生産方法。
- 工業: 小規模の技術、非暴力的な技術。
 - ①楽しみながら働くことを可能にする技術。
 - ②環境を破壊しない技術。
 - ③化石燃料の消費を最小限にする技術。
 - ④経営と労働の間の協調の関係。

持続可能な技術の開発

- 持続可能な技術の開発への公的資金の投入
科学的発見は市場メカニズムで促進されない。⇒公的資金援助が必要。
- 持続可能な技術の採用へのインセンティブ
 - ①環境破壊への課税、②排出基準の設定、③排出権取引。(公共政策による市場メカニズムの是正)
- 長期的な将来を見据えたグローバルな協力
 - ①グローバルな協定や国際法(CO2の削減)、②企業や市民団体の役割。

豊かさへの道

- 資源・環境の有限性と人間の欲望の無限性⇒長期的には成長の限界に到達。
- 欲望を満たす二つの方法:
 - ①効用最大化⇒より多くの消費で幸福を達成。仕事は不効用。(伝統的経済学)
 - ②欲望の抑制⇒最小限の消費で最大限の幸福を達成。仕事を通じて人間性の向上(仏教)
- ①と②のバランス⇒中庸の道。

吾唯足ることを知る



河上肇『貧乏物語』序

- 「人はパンのみにて生くものにあらず、されどまたパンなくして人は生くものにあらず。……思うに経済問題が真に人生の問題の一部となり、また経済学が真に学ぶに足る学問となるのも、全くこれがためであらう。」
- 「孔子また言わずや。朝に道を聞かば夕べに死すとも可なりと。人生の唯一の目的は道を聞くにある。……一部の経済学者は、いわゆる物質的文明の進歩(富の増殖)のみをもって文明の尺度とみなす傾きあれど、余はできうるだけ多数の人が道を聞くに至る事をもってのみ、真実の意味における文明の進歩と信ずる。」
- 「富なるものは人生の目的(道を聞くという人生唯一の目的)を選ずるための手段としてのみ意義あるに過ぎない。」

仏教と経営者

- 沼田恵範(ミツトヨの創始者)
- 加藤辨三郎(協和発祥)
- 土光敏夫(石川島播磨、東芝、臨調)

沼田恵範

- 仏教聖典の普及に尽力。
- 広島県の浄土真宗のお寺に生まれる。
- 高校卒業後、アメリカに留学。仏教の布教に努める。
- ミットヨ(精密測定機器)を創業(1934)。自分の利益のためでなく社会のためになる。他の人を苦しめないため、日本にないモノを作る。
- モノを作りながら人を作る。

加藤辨三郎

- 経営者:協和発酵社長。
- 科学者:グルタミン酸発酵法の開発。
- 仏教者:在家仏教協会会長
- 40歳を過ぎて仏教に開眼。
- 仏教と経営:「私のもつ経営理念は、すべて、仏教の因縁の道理に立脚しているといえよう。」「一瞬もとまらず、つねに変化している。このことをしっかりと把握することが大事。」「仏教の思想からいえば、本来、人間は平等である。」「⇒経営協議会の設置。

士光敏夫

- 石川島播磨重工業社長、東京芝浦電気社長、経団連第4代会長、第二臨調、行革審会長。
- 熱心な日蓮宗の信徒、朝晩法華経を読経。
- 質素な生活(食事、住居、通勤)
- 早朝出勤、早めに帰宅、読書。
- 社員との意見交換、現場視察、平等と革新。
- 苟日新、日日新、又日新(まことに日に新たに、日々に新たに、また日に新たなり)。